大いなる足跡
―まさる君とライオン―

高橋　麗子

まさる君はいつもお父さんと学校に来ています。入学当初は片時もお父さんと離れず、一日中一緒に過ごしていました。お家でもお父さんが仕事に出かけるときは泣いて引き止めるほどでした。お父さんはそういうまさる君の思いを汲んで、学校ではずっとそばにいて下さいました。

学校生活に慣れ、私たち職員とも仲良くなってくると、少しずつお父さんから離れて過ごす時間が出てきました。それでもふっとお父さんを思い出しては、お父さーん！、と大きな声で叫んで姿を確認することが

続きました。やがてその間隔が少しずつ長くなり、遂にはお父さんから完全に離れ、お父さんが迎えに来るまで遊んで過ごすようになりました。そうして気がつくと学年が変わっていました。私たち職員はそういう学校生活に理解をして下さったご両親と、それまでお父さんがずっと一緒にいて下さったことに今も心から感謝しています。

まさる君がお父さんから離れて過ごすようになる過程で、ライオンがいろいろな形でまさる君の身近にありました。私はライオンがまさる君にとって極めて特別な存在であると思いました。

ライオンキング

まさる君はビデオを観ることが好きで、学校に来ると必ずポンキッキ・電車・ウルトラマン・ディズニー映画などを、自分で早送りしたり巻き戻したりして観ていました。中でもライオンキングは大好きで繰り返し観ていましたが、お父さんと離れて過ごすようになった頃はお父さんと別れる直前に観ることが多くなりました。「お迎えくる」とお父さんに何度も何度も確認したり、手をつないだり、背中をかいてもらったりして、身体に触れてもらいながら観ていました。まさる君がどのくらいビデオを観るかは日によって違い、それはお父さんと別れるための気持ちの準備にかかる時間の違いのように思われました。長いときは何かしら離れ難い思いがあるのだろうと思い急がせずまさる君の気持ちが動き出すのを待ちました。やがて「ふうせんする」と言って裏庭に行くことがお父さんに行っていいよという合図になり、まさる君の方からお父さんと離れるようになりました。

まさる君はお父さんがすぐに出かけずにいると、「行ってくるよ」（お父さんが仕事に出かけるときの言葉）と言って早く出るように催促していました。そのときの真剣な表情から、お父さんから離れるときにまさる君が並々ならない決断をしていることがわかりました。そしてお父さんが出かけると、まさる君は駐車場にある自分の家の車を窓から見たり、お迎えがくると私に繰り返し確認したり、「お父さーん」と呼びながら校内を回ったりしました。そうしてお父さんがいないことを確かめても気持ちが崩れず、反対に確認することで気持ちが落ち着いていくような印象がありました。私にはまさる君が、お父さんがいなくても自分の力でがんばってみようとしているように思えました。

こうした生活が続いたある日、まさる君はライオンキングを観た後、ドライバーを使ってビデオを分解しテープをトイレに流しました。まさる君のライオンキングはこの時一旦終了しました。私は、ライオンキングが好きで毎日のように楽しんでいたまさる君が、お父さんから離れて過ごし始めたこの時期にビデオを分解したことにまさる君の自立の歩みの始まりを感じました。

ライオンちゃん

ビデオをトイレに流して二、三か月後、まさる君はホールの棚にあったライオンのぬいぐるみを手にしました。それまでにもぬいぐるみを手にすることはありましたが、この日は様子が違い一日に何度も手にしていました。この日からまさる君とライオンはいつも一緒にいるようになりました。まさる君は自分で「ライオンちゃん」と名前をつけ、学校に来るとまず手に取り、何をするにも一緒で、帰るときにはきちんと自分のロッカーに戻すという生活になりました。

水ふうせんをするときには濡れないように上手に脇

の下に挟んでいたり、隣の幼稚園に遊びに行くときにも、近くに買い物に行くときにも必ず連れていきました。幼稚園の園庭では遊具の上に乗せて離れた所から眺めたり、ライオンちゃんが転がって落ちたときには自分も脇に転がったりしました。一度はわざわざ二階のベランダまで行って下に落とし、上からじっと見た後ゆっくりと拾いに行ったことがありました。拾いあげたときは丁寧にライオンちゃんの砂を払い、大事そうに抱いていました。また、園庭にある大きなトンネルには以前から興味があり、時々中を覗いていたのですが、狭くて薄暗いせいかなかなか入ることができずにいたのが、ライオンちゃんを連れていくようになって数日後に挑戦しました。私もついていこうと近くまで行きましたが、押し戻されてしまいました。そして、まさる君とライオンちゃんだけで入っていき、別の口から出てきました。その直後ライオンちゃんだけを投げ入れ、追うようにしてまさる君も入り、ライオンちゃんを拾って出てきました。出てくると地面に転がし、まさる君も脇に転がってしばらく過ごしていました。初めての探検の成功を一緒にかみしめているようでした。

やがて朝来てもすぐにライオンちゃんを手にしない日があったり、校外に出るときに連れていかなかったり、途中で私に学校まで取りに戻らせたり、連れていったライオンちゃんを私に学校に戻しに行くように言ったりするようになりました。だんだんライオンちゃんと離れている時間が延びていきました。ある日、水ふうせんをしているときにライオンちゃんに水がかかりました。まさる君は手で拭きとっていましたがひどく濡れてしまいました。すると、まさる君は水ふうせんの水をライオンちゃんの頭や顔にかけてビショビショにしました。それからタオルで丁寧に拭き、自分のロッカーに寝かせてその後はライオンちゃんから離れて過ごしました。帰り際に再びライオン

ちゃんを取りホールへ行ったまさる君は、初めてライオンちゃんを手にした棚に向ってポーンと投げ、ちゃんと棚に乗ったことを確かめて帰りました。いつもと違う一日の終わり方に私はまさる君の気持ちの大きな動きを感じ、ライオンちゃんは必要なくなるのかもしれないと思いました。

変身

三週間という短い期間の中でまさる君とライオンちゃんの過ごし方はまたたく間に変化し、まるで洗い流すかのように水をかけてビショ濡れにしてからは、だんだん手にすることが減りました。そしてライオンちゃんを手にしてちょうど一か月がたった日の朝、まさる君はライオンちゃんの鬚を引っ張って抜きました。その後教室に置いたままにして遊んでいましたが、午後になってライオンちゃんの耳を引っ張り「とるの」と言いました。ハサミを出すとまさる君は自分で切ろうとがんばりました。結局うまくいかず、私に切るように頼みました。言われたように両耳を取ると、続いてたてがみを刈ることになりました。そして最後にしっぽの先についていた毛も刈りました。とうとうライオンちゃんは動物というより、何だか人間に近い姿になりました（写真）。すっかりやり終えたまさる君はライオンちゃんをじーっと見つめた後、私に持たせたまま一人で教室を出ていきました。私はライ

▲変身したライオンちゃん

オンちゃんをどうしたらいいのか迷いましたが、ひとまずまさる君のロッカーに入れておきました。この日、まさる君はとても満足した表情で帰っていきました。

次の日まさる君は一回もライオンちゃんを手にしませんでした。その後もあまり手にしなくなりましたが、改造して一か月程した頃、久しぶりにライオンちゃんを取り、他にウルトラマンの人形とロボットを一緒に持ってビデオを観ました。そしてビデオを離れるときには何も持たず、三体をそこに置いたままにしました。そんな日が数日ありましたが、以後ライオンちゃんはまさる君の生活に全く登場しなくなりました。

ライオンキング再び

ライオンちゃんから離れ、まさる君の生活の中にライオンが一年近く登場しなくなったある朝、偶然にもライオンキングのビデオを見つけました。他の子どもが観ているそばへ何気なく近づいたときでした。以前ライオンキングのビデオを分解してから一年半以上たっていました。

久しぶりに観たまさる君は、ヌーの大群に襲われた子ライオンを父ライオンが助け出し、ついには死んでしまう場面を普通の速さで三回観ました。以前は全編を早送りで流していましたが、この日はその場面だけをじっくりと観ていました。そして朝だけでなく、帰る前にもう一度観てから下校しました。それから数日は朝必ずライオンキングを全編早送りで流しました。再びライオンキングを観るようになってちょうど二週間目、その日も初めは早送りで流していましたが、父が命をかけて助けた子ライオンが成長して大人になり一人立ちする場面にくると普通の速さにしました。そしてその先はまた早送りしました。全編が終わったときまさる君は再びビデオを分解しました。一緒にいた

私は激しい衝撃を受けました。それは、これまでのまさる君とライオンにまつわる数々の出来事のすべてが一つのつながりとなってまさる君の中で生き続けていたことに気づいたからでした。そして、ライオンという対象がまさる君の育ちに大きな働きをしていたこと、ライオンを選んだまさる君の直感のすごさに思い到ったからでした。

初めの頃私は、まさる君にとってライオンはお父さんの代わりに彼を支え、守ってくれるもののように思っていました。ライオンとお父さんが重なっているようなそんなイメージをもっていました。しかし、まさる君はそれだけにとどまらないもっとたくさんの役割をライオンに見い出していたように思います。まさる君はライオンちゃんといることで勇気を出して新しいことに挑戦したり、苦手なことに取り組んだりすることができました。自分の中に隠れている力を引き出すことができたのもその一つだと思います。ライオンはいつも同じ役割ではなく必要に応じてその時どきでいろいろな役割をもっていたのだと思います。

まさる君と一緒にいることで、学校生活の中で子どもが選びとったものが、その子どもの気持ちと強くつながり、結果的にその子どもの自立と深くかかわっていることを目のあたりにしました。それはその瞬間その瞬間にはわからないことですが、時間の流れの中で見つめると捉えることができるということを教えられました。これをしていて何になるのか、どこにつながっていくのかわからないでいる日々の山のような積み重ねのすべてが育つことそのものであり、だからこそ一日一日が大切だということ。そういう思いで子どもたちと過ごすことの大切さをまさる君は教えてくれたのだと思っています。

（愛育養護学校）